

小学校教諭の運動実施状況と学校での運動遊びにおける児童との関わり

大矢 尚巨¹⁾・春日 晃章²⁾

Relation between elementary school teacher's implementation situation of the movement and movement play with a child

Naoki OYA¹⁾ and Kosho KASUGA²⁾

1) 岐阜大学大学院教育学研究科
Graduate School of Education, Gifu University

2) 岐阜大学教育学部保健体育講座
Department of Physical Education, Faculty of Education, Gifu University

キーワード：小学校，運動実施頻度，運動遊び

Key words : Elementary school, Exercise implementation situation, Movement play

I. 諸言

近年，学校現場における仕事量が増加し，教師の労働時間が問題となっている．平成25年2月に行われたOECD（経済協力開発機構）による国際教員指導環境調査（TALIS）¹⁾によると，日本の教員，1週間当たりの勤務時間は参加国最長（日本53.9時間，参加国平均38.3時間）であった．課外活動の指導時間（日本7.7時間，参加国平均2.1時間），事務業務の時間（日本5.5時間，参加国平均2.9時間），学校内外で個人で行う授業の計画や準備の時間（日本8.7時間，参加国平均7.1時間）など，上記の項目においても参加国中に比べて，日本人は時間が長い傾向にある事が報告されている．さらに，浄住ら²⁾は，平日は授業数が増加したことに加え，新学習指導要領の導入により教師の仕事が複雑化した現状から自宅へ仕事を持ち帰る量が多くなり，平日自宅でくつろぐ時間が減少したと報告している．平日の仕事量が増加したことや週5日制になった現在でも休日に仕事を持ち帰り，残業をする教師や他学校に出向き，研修会に参加する教師も多くみられる．このような現状故に，小学校の教師が休み時間に子ども達と運動遊びをする姿が見られなくなってきている．加えて，教師自身のプライベート時間の減少から運動を実施する時間も減少しており，運動，スポーツや体育に関する意識も低い可能性があると思われる．

村瀬ら³⁾によると，親世代においては外遊び・スポーツ遊びの多様性に対して教師の影響は大きかったが，現代では学校教員が子どもたちに遊びを教える機会が減っていることが考えられ，外遊び・スポーツ遊びへの影響力が低下していると報告している．以前は，教師と子どもが一緒に遊ぶことで子ども達は教師から遊びを学び，その遊びを友達とも遊ぶようになっていた．しかし，現代では教師と子ども達が一緒に遊ぶ時間が減っており子ども達の運動遊びへの影響力が低くなっていると考えられる．運動遊びをして身体を動かすと子どもの体力は大きく向上するという事は，これまでの様々な研究からも明らかであり⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾，子ども達と運動遊びをすることは非常に大切だと考えられる．しかし，小学校の教師における体育への取り組みについては大内ら⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾が運動への態度，運動実施日数との関連を明らかにしているが，教師自身の運動実施頻度と休み時間における子ども達との運動遊びの実態を比較した研究は全くされていない．

そこで本研究は小学校教諭の運動実施状況と子ども達との運動遊びを通じた関わりについて検討することを目的とした。

II. 研究方法

1. 対象

本研究の対象はG県T市の20代から50代までの小学校教諭237名（男性62人，女性175人）であった。

2. 調査方法および質問内容

G県T市のすべての小学校教諭に対してアンケート調査を行った。質問内容は、教員自身の運動実施頻度（以下，運動実施頻度），教員自身の体力に対する自信の程度（以下，体力自信），子ども達と一緒に運動遊び（体育以外）をする頻度，確保したい子どもとの運動遊び時間，体育で子ども達に運動の楽しさを伝えられている程度の5項目とした。

また，運動実施頻度，体力自信の2項目は3群に分け，1，2（週に5日以上と週に3～4回，非常にあとややある）と回答した場合を上位群，3（週に1～2日，どちらともいえない）を中位群，4，5（月に1～2回とほとんどしない，あまりないと全くない）を下位群とした。子ども達と一緒に運動遊び（体育以外）をする頻度，今以上に子ども達と遊ぶ時間を確保したいか，体育の授業で子ども達に運動の楽しさを伝えられている程度の3項目は，1（ほとんど毎日，非常に思う）と回答した場合を5点，2（週に3～4日，やや思う）を4点，3（週に1～2日，どちらとも言えない）を3点，2（月に1～2日，あまり思わない）を2点，1（ほとんどしない，全く思わない）を1点とし，項目を得点化した。

3. 統計処理

本研究では運動実施頻度，体力自信の2項目と子どもとの運動遊びの頻度，確保したい子どもとの運動遊び時間および体育で子どもたちに運動の楽しさを伝えられている程度の3項目を比較検討するため，年代別，群別の対応のない二要因分散分析を適用し，有意な群間の差異が認められた場合には多重比較検定を行った。なお，本研究の統計的有意水準は，全て5%未満とした。

III. 結果

運動実施頻度と体力自信における男女別の回答数の割合を表1に示した。表2，3は二要因分散分析および多重比較検定の結果を示している。

運動実施頻度では，男女ともに，中位群，下位群が多く，全体の約90%を占めていた。体力自信では，男性においてほぼ同じ割合になったが，女性では体力に自信のないと答える教師が多くみられた。子どもと一緒に運動遊びをする頻度では，男性，女性関係なく子ども達と運動遊びをしていない教師が50%以上存在した。確保したい子どもとの運動遊び時間において，男性は約80%，女性は65%が非常に思う，やや思うと肯定的な意見が多かった。体育で子ども達に運動の楽しさを伝えられている程度については，男性，女性共にやや思う，どちらとも言えないという回答が全体の70%であった。

子どもと運動遊びをする頻度と年齢において，有意な主効果が認められ，20代が40，50代に比べて，30代が50代に比べて有意に高い値を示した。確保したい子どもとの運動遊び時間と年齢において，有意な主効果が認められ，20，30，40代が50代に比べて有意に高い値を示した。体育で，運動の楽しさを伝え切れているかと運動実施頻度において有意な主効果が認められ，運動実施の中位群，低位群が上位群に比べて有意に高い値を示した。体力自信と子ども達と運動遊びをする頻度，確保したい子どもとの運動遊び時間および体育で運動の楽しさを伝えられているかの分析では，どの項目においても有意な差異は認められなかった。

表1 現在の運動実施頻度と体力自信の分布

項目	性別	上位群 (%)	中位群 (%)	下位群 (%)	未回答 (%)
現在の運動実施頻度	男性	6.6	37.7	54.1	1.6
	女性	5.2	20.7	73.6	0.6
現在の体力自信	男性	41.0	27.9	31.1	0.0
	女性	17.2	28.7	54.0	0.0

表2 二要因分散分析および多重比較検定の結果（運動実施頻度）

項目	比較項目	平方和	F 値	P 値	判定	多重比較検定
運動遊びの頻度	年齢	13.954	5.126	0.002	**	20>40, 50 30>50
	運動実施頻度	2.333	1.285	0.279	n.s	
	交互作用	4.099	0.753	0.608	n.s	
確保したい子どもとの運動遊び時間	年齢	9.147	3.471	0.017	*	20, 30, 40>50
	運動実施頻度	0.405	0.230	0.794	n.s	
	交互作用	1.192	0.226	0.968	n.s	
体育で楽しさを伝えられているか	年齢	1.101	0.592	0.621	n.s	
	運動実施頻度	4.289	3.457	0.033	*	中, 小>大
	交互作用	1.341	0.360	0.903	n.s	

n.s: non significant * = P < 0.05 ** = P < 0.01

表3 二要因分散分析および多重比較検定の結果（体力自信）

項目	比較項目	平方和	F 値	P 値	判定	多重比較検定
運動遊びの頻度	年齢	2.481	1.379	0.254	**	20>40, 50 30>50
	体力自信	2.481	1.379	0.254	n.s	
	交互作用	3.109	0.576	0.749	n.s	
確保したい子どもとの運動遊び時間	年齢	22.583	8.467	0.000	*	20, 30, 40>50
	体力自信	1.348	0.758	0.470	n.s	
	交互作用	2.197	0.412	0.871	n.s	
体育で楽しさを伝えられているか	年齢	4.631	2.499	0.061	n.s	
	体力自信	2.546	2.061	0.130	n.s	
	交互作用	4.301	1.161	0.329	n.s	

n.s: non significant * = P < 0.05 ** = P < 0.01

IV. 考察

子どもと運動遊びをする頻度と年齢において、20代が40、50代に比べて、30代が50代に比べて有意に高い値を示した（図1）。渡辺ら¹²⁾は20、30、40、50代と年代を追うごとに体育活動参加意識は低下する傾向にあり、特に20、30代の意識では大きな開きはないが、50代の参加意識では消極的な傾向を示していると報告している。本研究の結果からも、運動遊び参加意識が年代が上がることで順に低下し、ベテラン教師は子ども達と遊ぶ頻度が少なくなっている事が推察される。

確保したい子どもとの運動遊び時間と年齢において、20、30および40代が50代に比べて有意に高い値を示した（図2）。年代の若い教師ほど、今以上に子ども達と遊ぶ時間を確保したいと感じている傾向にあった。しかし、年代が上がるにつれて、今以上に子ども達と遊ぶ時間を確保したいと思う教員が少なくなっている事が明らかになった。大内ら⁹⁾は、男性教師の体育的指導への関心は加齢とともに減退する種目があり、その原因のひとつに、指導にあたる際の体力的消耗が考えられると報告している。加登本ら¹³⁾、徳永ら¹⁴⁾の研究では、小学校教員の体育授業に関して、全般に若い教師の方が学びたいと考える意識が高い傾向にあった。熟練期の教師は比較的学びたいと考えていない傾向にあ

ると明らかにしている。本研究の分析結果と同じように、教師は年代が上がるにつれて体育活動に対して意欲が減退する傾向にある。そのため若い教師と比較した際、ベテラン教師は運動遊びに対しての意欲が低くなると考えられる。また、藤原ら¹⁵⁾は、40、50代などの年代が重要な公務分掌を担い、実質的に学校を牽引している立場でありストレスを感じていると報告している。ベテラン教師は若い教員の上司という立場になり、事務作業や教職のまとめ役、主任といった役割を請け負うことから、若い教師とベテラン教師ではベテラン教師の仕事量が多く、子どもと遊ぶ時間を作るのが困難である可能性がある。また、本研究の分析結果で有意差は認められなかったが、大内ら⁵⁾の報告と同様にベテラン教師に体力がないといった回答が多くみられた事も関係していると推察される。

体育の授業で運動の楽しさを伝え切れていると感じている教師は年代間で有意な差は認められなかった(図3)。しかし、運動実施頻度の中位群、低位群が上位群に比べて有意に高い値を示した(図4)。大内¹⁶⁾は、運動実施日数と体育教材への取組みとの関連については、相互の関連性が非常に高いという結果を得た。日頃、運動する機会の多い者ほど体育教材への取組みに積極的であることが明らかになったと報告している。このことから、運動を定期的に行っている教師は、運動実施頻度が少ない教師に比べて、子ども達にもっと体育を通して運動の楽しさを伝えることができていると考えている事が示唆された。

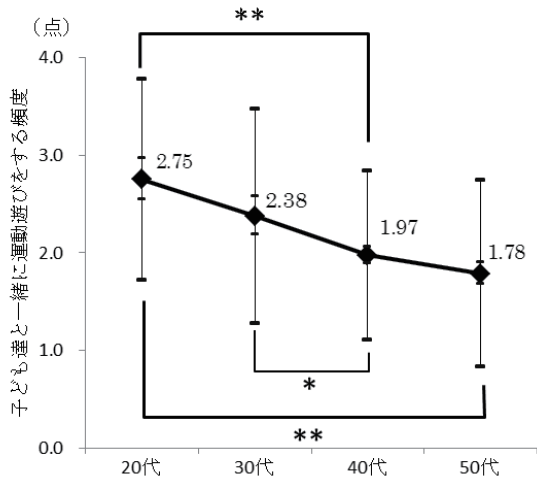


図1 年代と子ども達と一緒に運動遊びをする頻度の比較

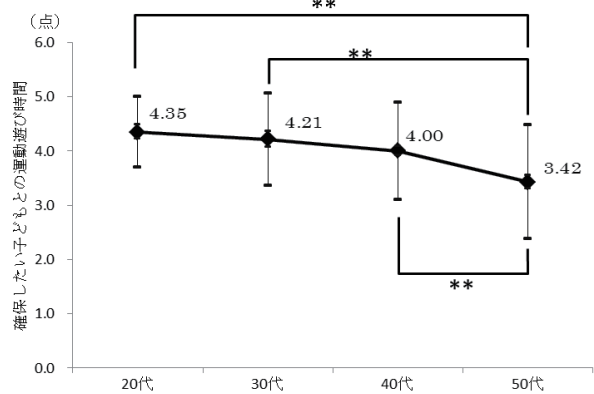


図2 年代と確保したい子どもとの運動遊びの時間との比較

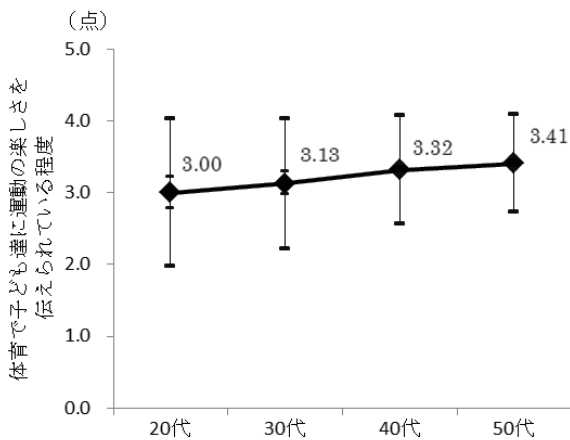


図3 年代と体育で子ども達に運動の楽しさを伝えられている程度の比較

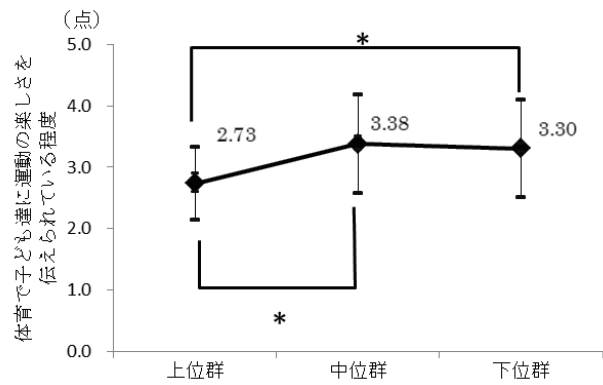


図4 運動実施頻度と体育で子ども達に運動の楽しさを伝えられている程度の比較

V. まとめ

本研究は、小学校教諭における運動実施状況と子ども達との運動遊び状況の関連を明らかにすることを目的とした。方法は質問紙によるアンケート調査であり、対象は小学校教諭237名であった。現在の教員自身の運動実施頻度（運動実施頻度）と自身の体力に対する自信の程度（体力自信）は3群に分け、その他、3項目は回答を項目ごとに得点化した。分析の結果、子どもと運動遊びをする頻度と年齢において、20代が40、50代に比べて、30代が50代に比べて有意に高い値を示した。確保したい子どもとの運動遊び時間と年齢において、20、30および40代が50代に比べて有意に高い値を示した。体育で運動の楽しさを伝えられている程度と、運動実施頻度において、運動実施頻度の上位群が中位群、低位群に比べて有意に低い値を示した。以上のことから、若い教師はベテラン教師に比べて、子ども達と運動遊びをする頻度が多く、今後子ども達と一緒に運動遊びをしたいと思っているという事が考えられた。また、運動実施頻度が多い教師は、運動実施頻度が少ない教師に比べて、子ども達にもっと体育の楽しさを伝えられると感じていることが考えられる。その一方で、運動実施頻度にかかわらず50代のベテラン教師は、子ども達との運動遊び頻度が少ない事に加え、今後もっと運動遊びをしていきたいという意欲が低いという事が示唆された。

参考文献

- 1) 国立教育政策所編「教員環境の国際比較－OECD国際教員指導環境調査（TALIS）2013年調査結果報告書（株）明石書店, 2014,
- 2) 浄住護雄他. 教師の健康管理に関する研究 熊本大学教育学部紀要. 自然科学. 第53号. 71-75. 2004
- 3) 村瀬浩二 and 落合優. "子どもの遊びを取り巻く環境とその促進要因：世代間を比較して." 体育学研究 52.2 (2007) : 187-200.
- 4) 高木綾子 and 春日晃章. "小学校3年生の遊び志向特性と体力との関係." 岐阜大学教育学部研究報告. 自然科学 37 (2013) : 113-118.
- 5) 中村和彦. "乳幼児の運動遊び (2) 子どもにとっての遊びの意義--特に運動特性に着目して." 子どもと発育発達 1.2 (2003) : 123-125.
- 6) 池田裕恵. "子どもの遊びの意味 (特集 子ども遊びと心の発達)." 子どもと発育発達 3.3 (2005) : 132-135.
- 7) 小林寛道. "子どもにとってなぜ運動は必要か (特集 子どもを育む運動)." 体育の科学 58.5 (2008) : 300-304.
- 8) 馬場礼三. "運動をしない子どもはどうなるのか (特集 子どもを育む運動)." 体育の科学 58.5 (2008) : 305-310.
- 9) 大内義昭. 小学校教師の教科外体育指導における一考察. 研究紀要, 1986, 19 : 167-172.
- 10) 木村一郎, 阿部正臣, 梶原洋子 & 穂田清. (1977). 629 小学校助教諭の体力・技能が及ぼす教科体育への意識 (第2報). 日本体育学会大会号, (28), 411.
- 11) 穂田清. "小学校助教諭の体力・技能と教科体育への意識." 日本体育学会 30 回大会号 (1979) : 395.
- 12) 渡部憲一他 身体活動に対する参加意識について：社会人を対象として 日本体育学会大会号 (24), 47, 1973-09-01
- 13) 加登本仁. et al. "体育授業に関する小学校教師の力量形成についての調査研究：教職経験年による差異に着目して." (2012). 滋賀大学教育学部紀要, 教育科学, 第62号, pp. 73-85
- 14) 徳永隆治・加登本仁・藤本翔子 (2012) 現職教師の求める体育授業の研修内容に関する調査研究.
- 15) 藤原忠雄, 古市裕一 and 松岡洋一. "教師のストレスに関する探索的研究：性, 年代, 校種における差異の検討." (2009).
- 16) 大内義昭. "小学校教師における体育教材への取組みに関する一考察." 研究紀要 18 (1985) : 39-45.